

# ちよつと変わった経済原論

— 変容論的アプローチ —

小幡道昭

## 1 チェンジ

資本主義は変わったか。リーマン・ブラザーズの劇的な倒産から一年がたった二〇〇九年九月一五日、こんな見出しがメディアを埋め、いろんな人がいろんな現象をあげては、変わった、といっていた。主語も、そして述語も無規定な、こんな問題に答える自信は私にはないが、不況対策優先ということではギリギリまで引き延ばした衆議院選挙も、蓋を開けてみれば民主三〇八議席の圧勝、実体が変わったかどうかはわからないが、変革を口にする人が増え、ともかくムードが変わったことはたしかなようだ。

日本の場合は、変わったといっても、いまのところまだ政権交代どまりであるが、金融危機の震源地アメリカにおけるチェンジは社会変革の運動を内に含んでいた。二〇〇八年に入っ

てはじまった民主党大統領予備選挙に、若いオバマ上院議員はチェンジをかかげて立候補した。知名度抜群のヒラリー・クリントン上院議員に対して当初劣勢だったオバマ候補が、サウスカロライナの予備選で劇的勝利を取めたとき、流れは変わった。続いて、共和党マケイン候補との本選挙に臨むなかで勃発したリーマンショックとそれに続く経済危機は、チェンジをかかげるオバマ候補に不利にはたらくという見方もあったが、実際は逆に追い風となった。

転機となったサウスカロライナの党大会でオバマ候補は、支持者に対するスピーチを *Yes, we can change* という印象的なフレーズで締めくくった。この簡明なフレーズは、米語が苦手な私にもよく聴きとれた。でもこのチェンジは、自動詞なのだろうか、他動詞なのだろうか、などとつまらないことが妙に気になって、インターネットでスピーチの原稿を読んしてみた。おもしろかったのは、チェンジという単語を引きだすまえに、若者の無関心にふれ、金持ちが貧乏人のことを考えるはずがないとか、白人と黒人がいっしょにやれるはずがない、と思っ込んではいけない、我々はシニシズムにおちいっ

てはならない、といったことを繰り返していることだ。つまり、我々は「変わる」ことができる、ということ強調しているのだ。このチェンジは自動詞なのだろう。そのあとをはじめ、医療制度改革、基礎教育の充実、低賃金労働の脱却などに言及し、具体的な状況を「変える」ことができる、と力強く主張する。こちらは、どうも他動詞のようだ。自分たちの考え方を切り替えることで、既存の社会秩序の壁を打破できるのだ、というメッセージを送っているようだ。立派な左翼じゃないか。自分たちの価値観を問うことになしに、どの政党が得になりそうか、投票日に選ぶ権利を行使すればよい、というのとはワケが違う。

選挙戦の実態は違うと思うが、それでもこのチェンジは、草の根的なムーブメントをつくりだす魅力をもっている。そこには、一九六〇年代末、ベトナム反戦を叫び、平等な公民権の確立をかけた、エスタブリッシュメントにプロテストした若者たちの面影がチラリと顔を覗かせていた。そしてだんだん思い出してきた。このようなアメリカのニュー・レフトは戦後民主主義の申し子だった私には理屈ぬきにピンときた。新左翼のマルクス主義者の大学生たちから、「そりやズブズブの民主主義だろ。自己否定できなげやダメさ。」などとお説教されるまえに、高校時代の私はすでに自然発生的な反戦運動に自然に馴染んでいた。マルクスの化身のようことをいうボスがいて、上意下達の規律に縛れる党派では、最後までパトス

がわからなかった。多少の紆余曲折をへて大学で経済学を教えるようになり、さすがにチェンジというシンプルな言葉は使えなかったが、このようなチェンジの意味については、あれこれと考えてきたのだ。

## 2 変化と変容

では経済学は、チェンジという問題に対して、どのような答え方をしてきたのか。私がいちおう「専門」にしているのは、マルクス経済学の原理論で、事実、私はこれしか知らない。だから、いずれこちらに話は絞るが、この原理論も許多あまた身内のある「経済理論」の一つという顔をしているので、まずこの広い意味での経済理論がチェンジをどう捉えているのか、考えてみよう。

といつても、ほとんどの理論家は「そんなことは、いまさら問うまでもない」というだろう。というのも、経済理論は、商品価格にせよ、地価や株価にせよ、雇用にせよ、賃金にせよ、その動きを説明することを中心課題にしているからである。経済学の理論は変化を説明する「経済法則」が存在すると主張することで、人間やその社会を対象とする他の学問に対して、社会科学としての優位性を誇ってきた。かつて盛んに風潮された、このような優越性を信じるかどうかはおくとして、ともかくユニークな立場をとってきたのはたしかだ。

しかし、考えてみれば、意識的に行動しているはずの人間の社会において、自然科学バリの法則が支配しているというのは奇怪なことだ。たとえば、私がいまこの文章を書いているのも、何か私の知らない「法則」に支配されて書いているのだろうか？ あなたがいまこの文章を読んでいるのも、法則で予見可能なことなのだろうか？ これはちよつと夢遊病者の状況だ。「私は書くこうと思つて書いているのだ。」というところ「そう思うのはもつともだが、それはあなたの過去のあの経験が無意識のなかでかたちを変えて、書くよう促しているのだ。」と親切に分析してくれたりする。「余計なお世話だ。他人の心理分析をしたがるあなたの深層心理をまず分析したら。」と思わず言いたくなる。経済理論はさすがにそこまでナイーブではない。

個人の意識的行動を直接支配する法則があるというのはヘンだ。しかし、経済法則というべきものはたしかにある。というのも、人間は、相手の考えを読んで、自分の行動をきめる。自分の意志で行動しているというが、その決定は相手の意志によつて左右される。だから、……か？ まだ、ちよつと条件が足りない。これなら政治法則だつてありそうだ。肝心なのはこの「相手」の素性で、それが不特定多数となることが決定的となる。相手が匿名性を帯びるのは市場の特徴である。「マーケットが利上げをきらつた」などと、日本語だとぶつうはチグハグな感じを与える物主構文が妙にピッタリする。

他者依存の決定と主体の匿名性といった条件が整うと、そこに個人の意志をこえた経済法則の支配がみられるようになる。このあたりは、マルクス経済学に限らず、どの経済学でもだいたい同じような説明をしている。

しかし、経済法則で変化を説明してきたのだから、チェンジの問題を事改めて問うには及ばないというなら、だいたいピントが外れているとすぐ気づくだろう。チェンジといつているのは、法則に則つた変化ではなく、法則を支える基礎条件が変わることである。あとのほうは、変化と区別して、変容とよぼう。法則にしたがつて現象は「変化」するが、その法則を支えている状態は「変容」するのである。「どんなに現象が変わつても、変わらないのが法則であるのだ」、何だか同義反復の本質論だが、これで頑張る頑固な理論家もけっこう多い。しかし、ある法則が支配していた状態から、別の状態に移るということは経済現象の常だ。だから、経済学者はしょつちゅう「経済学の危機」を唱える。ほとんど万年危機論だ。

なぜ、自分たちが同じ危機論を繰り返さなくてはならないのか、奇妙なことに、経済学者がそのワケを自覚的に追求してきたとは思えない。そのたびに、ただ新しいモデルのセットを作り替えてきただけである。「今度こそ、ピッタリのニュー・モデルだ」というのだが、その状態は変容する。これだけ、たくさんモデルをつくれれば、モニタージュ写真のようなもの

で、どれかが当たるのは、ある意味、当然だ。しかし、犯人は次々に変身する。これでは「七つの顔をもつ男」の正体はわからない。モデル論が眼前の状態をより精緻にコピーすることに熱中すればするほど、ある状態から別の状態へどのように変わるのかという問題は視野から消える。新しい経済学では、古くなったモデルはサッサと捨てられ、モデル間の交換を説明するメタモデルの存在などは端から相手にされない。

### 3 変える力と変わる力

さて、「流れを変える」、「状況を変える」、という意味でのチェンジは、変化ではなく、変容のことだとすると、この変容という問題に対して経済理論はどのような答え方をしてきたのか。ここで、話をマルクス経済学の原理論に進め、「マルクス経済学ならこの問題に答えられる。今こそマルクスだ。」と素直にゆきたいところだが、ここにちよつとした屈折した物語がある。「今こそマルクスだ。」という人は、状況が変わればすぐに「マルクスはもう古い。これからはケインズだ、シュンペーターだ。」という人だ。この種の浮気女に何度も裏切られ、マルクス経済学もずいぶん大人になった。この物語を知ること、昨今の変革ムードをみるにつけ、あながち無駄ではないと思うので、三幕仕立てで語ってみよう。

第一幕は出生の場だ。フランス大革命のあと、初期の社会主義者にとって社会変革は焦眉の課題であった。彼らは政治

革命に続いて経済改革へと焦点を移し、新しい学問としての経済学を旺盛に吸収し、そこに解答を求めた。市場経済の不備をつき、その改革を求めるといふ方向は、彼らの一つの共通基盤であった。たとえば、フランスで支配的であったブルードン派の社会主義者は、金属貨幣がさまざまな弊害をもたらすと考え、労働証券に貨幣の機能を担わせる改革を提唱し、小生産者の資本不足を無償信用によつて補完する人民銀行を考案した。イギリスでも、協同組合的な生産組織によつて、私的競争の弊害を取り除くべきとする主張が現れ、不況対策として、紙券発行による有効需要喚起を早くも唱えるものも登場した。この状況は、今日の変革ムードと一脈通じるものがありそうに思われる。

初期の社会主義者は、発展しつつある資本主義の影の部分に光をあて、それを取り除くことで、あるべき社会を理性の力で建設できると信じていた。市場経済の仕組みを知れば、それを改善し操作できる。人間の社会は、人間が意識的に変えることができる、「変える力」に強い信頼を寄せていたのだ。彼らは、自己の立脚する価値観、個人主義的な社会観といったものの普遍性を疑うことはなく、それに合致するように社会をつくり変えようとしたのである。モダニズムといわれる所以である。

しかし、これでは、本質的には何も変わらないではないか。自分たちの価値観を絶対的なものとして変えることを頑な

に拒み、ただ市場や制度をそれに合わせようとしているだけだからだ。こうした社会主義者に対して、マルクスは後発の批判的社会主義者として登場した。マルクスが強調したのは、資本主義が自ら変容する社会であるという観点であった。つまり「変わる力」のほうに焦点を当てたのである。

このため、マルクスが経済学に求めたものも、先行の社会主義者たちとは根本的に異なっていた。経済法則を利用して社会を改良するとか、あるいは不完全な市場を改善して完全競争のメリットを活かすためにとかといった観点はない。その法則は、意識的に利用したり部分的に取り替えたりできない「自然法則」だという。彼の眼前に広がる「近代社会の経済的運動法則」の客観的説明こそが『資本論』の課題だとその序文に謳っている。

ただその場合、「自然法則」といつても、それはかなり特異な性質のものを含んでいた。同じ軌道を巡回する天体運動や、振幅をくりかえす振り子運動のようなタイプの法則だけではない。むしろマルクスが重視したのは、特定の方向に向かつて累積的に発展する傾向法則であった。この発展法則こそ、「近代社会の経済的運動法則」のコアだった。社会は変わるが、その変わる力を説明する法則があるというのである。ここから、表裏の関係にたつ二つの特徴的な主張がでてくる。一つは収斂説で、もう一つは自己崩壊論である。収斂説というのは、簡単にいってしまえば、資本主義は発達するに

つれて単一の姿に近づいてゆくという主張である。先行するイギリスの現在の状況は、遅れて資本主義化したドイツの近未来だというのである。マルクスが西ヨーロッパという枠をこえて、全世界に収斂説を考えていたかどうかは、今日のグローバルイズムを考えるうえでもしろうい問題だが、一九世紀に生きたマルクスの関心は当時のセンターに向けられていた。

では、この収斂するセンターの内部はどんな状態に行きつくのか。それが自己崩壊論である。これも決めつけると反論がいくらでもできるところだが、一言でいえば、資本主義は発展するとともに、内部の矛盾、対立を深め、成り立ちがたい状況に陥る、という主張である。マルクスが若いときにエンゲルスと意気投合してアウトラインを描いた唯物史観は、晩年の『資本論』のうちにかたちを変えて精緻化されていた。

現行の『資本論』は三巻構成だが、生前に自ら刊行したのは第一巻のみで、それは「商品価値」にはじまり「資本蓄積」で終わる。芭蕉の『奥の細道』は連句仕立てで、表と裏に分かれているときくが、『資本論』第一巻も表と裏からできている。前半は商品の価値通りの交換が、労働力商品にも適用されると、資本のもとに必然的に利潤が生じる、という剰余価値論である。これは実は、資本の利潤が商品経済のルールに悖る、と主張する社会主義者に対する批判になっている。むしろ、利潤はルールの帰結だというのである。もちろん、利潤の獲得は正当だ、といっているのではない。それは、道徳

的に不正だ、いや正当だ、とレベルの問題ではないのだ、というのである。こうして後半では、この利潤を資本が専ら蓄積にまわすと、生産力が急激に上昇するなかで雇用量が収縮するという窮乏化法則が説かれている。さらに、資本家間でも競争が激化し、小資本が打ち負かされ大資本に吸収されるという集中・集積論が展開される。極端に言えば、少数の資本家と大量の失業者が面と向き合う世界で、これでは世の中、流石にもつわけがない。

フランス革命の余韻漂う西ヨーロッパ、急進社会主義者が己が理性の閃きに酔いしれ、さまざまな社会改革の妙案を宣傳する時代、「ちょっと変わった社会主義者」が遅れてやってきて曰く「そんなインテリが頭のなかで練り上げたケチなプランで、世界は自由に変えられるものじゃない。資本主義は発展の故に自壊する。その原理、斯くの如し」と。第一幕はこんなところだろうか。

#### 4 資本主義の変容

ところが、資本主義はマルクスが描いたのとは異なるかたちで変容した。遅れて資本主義化したドイツの現実、マルクスが描いた『資本論』の世界とはズレていた。重化学工業をベースにした新興産業でイギリスを凌ぐめざましい発展を遂げながら、農民層分解は進まず従来型の中小経営も温存される、一種の二重構造が定着してゆく。このあたりの歴史分

析はともかく、二面をもった現実、いわゆる「修正主義論争」を生むことになる。「資本主義は変わった、もはや『資本論』は使えない」とするベルンシュタインたちと、「その変化こそ『資本論』の傾向法則が貫徹した結果だ」というカウツキーたちとの間の論争である。

似たような論争は、日本でも展開された。論争の主役の多くは、第一次世界大戦後のドイツに留学経験をもつ少壮のマルクス経済学者だった。ここでは、そもそも日本は資本主義なのか否か、明治維新はブルジョア革命か、天皇制とは何か、といった戦前の激しい論争となった。「日本資本主義論争」というそうだ。戦後生まれの私は、直接論争の現場をみたわけではないが、その名残がまだ濃厚な時代に育った。「この日本を資本主義と言わずしてどこに資本主義がある、来るべき革命はプロレタリア革命だ」という世界同時革命を掲げる学生と、「いやいや、日本はまだ、対米従属の半植民地、民主主義も未成熟、市民革命が先で、プロレタリア革命はその後だ」と二段階革命を唱える学生が、ガンガンぶつかっていた。革命の「カ」の字も言わなくなった後も、これは尾を曳いた。ことあるごとに欧米と比べ日本は「遅れている」と嘆いてみせるキザな「近代化」論者と、何かにつけ「日本的」という形容詞をつけて賞賛する論者はいつまでも残った。ここまできるともう、権威主義の二つのあり方というほかない。

話を戦前に戻すと、こうした論争をクールに眺める「ちよっ

と変わったマルクス経済学者」がいた。宇野弘蔵という学者で、私は警咳に接したことも尊顔を拝したこともない。高校生の頃に住んでいた早稲田界隈の古本屋に、この先生の本がたくさん並んでおり、そのころから興味本位で読んできたので、私のほうは顔なじみのつもりでできたがアカの他人だ。この人の説くところは、とどのつまり、この論争には方法的な限界がある、『資本論』のような資本主義の原理論を、その歴史的现实に直接適用する方法が誤りのもとだ、ということのようにだ。遅れて資本主義化した国は、独自の歴史的特徴を帯びる。日本が資本主義化したのは、資本主義が異なるタイプに分かれて発展した帝国主義の時代だ、だから、原理論をベースに資本主義のタイプを類型化し、この発展段階論を基準に現状分析に臨むべきだ、というのである。いわば、原理論の間接適用説、段階論の媒介説である。

口でいうのは簡単だが、この方法で中身を拵えるのはたいへんである。宇野が実際におこなったのは、主としてこうした枠組みに沿った原理論の構築であった。その核心を一言でいえば、純粋資本主義論ということになる。つまり、商品経済的な関係だけで自立的に運動する純粋な資本主義像を論理的に構成してみせることである。そのため、宇野は『資本論』を批判的に再検討し、そこに含まれる誤りは誤りとして除去すべきだと主張した。『資本論』には理論的に説明できない一九世紀のイギリスに特有な要因が混入しており、とりわけ窮

乏化法則や集中・集積論は原理的に説明できない十九世紀のイギリス資本主義に特有な歴史的現象であると切つて捨てたのである。

これはマルクスの収斂説と自己崩壊論を、ちょうど鏡像のようにひっくり返す結果になる。資本主義はその発展とともに、純粋な姿に近づき、その結果、内部の矛盾が激化して崩壊するのではない。逆に純粋な資本主義であれば、景気循環を通じて繰り返し矛盾を解決し、永続的に発展できる。ところが現実の資本主義は、一旦はこの状態に接近しながら、十九世紀末にはその傾向が逆転し、商品経済外の不純な要因に強く依存する体質に変わった。純粋な資本主義から乖離するに至ったところに、資本主義の歴史的な限界があるというのである。

正統を尊ぶ精神からみれば、これは以ての外、『資本論』に誤りなどあろうはずもなく、すべては読み方が浅いからだ」とたちまち異端審判が下され、「そんなのはマルクス理論ではなくて、宇野理論だ」と擲擻される。若いころは判官鼻眞で「本当は正しいから異端視されるのだ」などと、逆にこれだけで読む価値があるように勘違いもしたが、ともかく、資本主義から社会主義に移るのではなく、資本主義そのものがまずその姿かたちを変えるのだという変容の問題をクローズアップし、この変容はいかに論られるべきか、意識的に方法論を展開した意義は大きい。

輸入したばかりの『資本論』を現実の分析にどう活かすべきか、気鋭のマルクス主義者たちが喧々囂々の論争を展開していた戦前の日本、それを端からじつとみていた「ちよつと変わったマルクス経済学者」がいた。彼は戦後になって、こんなことをいいだした。「資本主義といつてもそれ自身変わる、これをどう捉えるか、方法論からやりなおしだ」と。第二幕はこんな感じだろうか。

## 5 資本主義の多様性

しかし、宇野の方法論は原理論のなかから変容の契機を永久追放するに等しい結果になった。現実の資本主義がどんなに変わっても、資本主義である以上、変わらぬ本質があるはずだ、これを純粹に取りだしたものが原理論だ、ということになる。たしかに、景気循環のような「変化」は含まれるが、それはあくまで法則にしたがつて繰り返す運動だからである。それでも、資本主義は変容する。とすれば、それは純粹資本主義の想定にたつ原理論で説明できない不純な要因によるものだ。現実の資本主義は不純な資本主義として、どれもみな混合資本主義だというわけである。やけに形式的な二分法で、これで変容が説明できるのかと思ってしまうが、次のように付言すれば、立派に可能になる。

資本主義はその発展期においては、純粹資本主義にますます接近する傾向を示した。ところが、一九世紀末に後発資本

主義国が重化学工業をベースに資本主義化するなかで、この純化傾向は逆転したという純化・不純化論である。詳しい説明は避けるが、不純化というのは、たとえば保護貿易政策や社会政策といった国家による政策的関与や、独占体や労働組合など私的競争の制約など、幅広く覆う概念である。この接近し離れるという変容は、原理論では扱えない。原理論は純粹な資本主義なら自立的に発展できるということを示すだけで、純化・不純化という変容は発展段階論で分析されることになる。

このアイデアは、ドイツの資本主義化を念頭におき、先行するイギリスと異なるタイプの資本主義が台頭することで第一次世界大戦にいたるといって、古典的帝国主義の時代を念頭において固められたものだった。そしてこれを契機に史上初めて社会主義国ソビエト連邦が誕生する。イギリス資本主義の誕生が資本主義の時代の始まりであるとすれば、たとえば一国一地域でも世界的には社会主義の時代に突入した、マルクス主義者の目からみればそうなる。主義者たらざる学者の宇野もまた、この点では同じように、第一次大戦以降は社会主義への過渡期だと明言していた。

しかし、後知恵に過ぎないが、二度の世界大戦は西ヨーロッパと極東日本の資本主義化に固有の問題と捉えたほうがよい。ここでは、資本主義の成立は国民国家の形成と深く結びついてた。その発展は対外的には国家間の対立とナシヨナリズム

の高まりを引きおこす必然性があつた。国民国家と結びついた西ヨーロッパの資本主義が、ナショナルリズムと帝国主義のくびきを脱することができぬまま、やがて第一次世界大戦に突入し、その結果、相対的地位を低下させるなかで、その西と東にインター・ナショナルを建前とする双子の超大国、合衆国とソビエト連邦が台頭し、この人工国家が対抗するかたちで二十世紀の世界は支えられてきたようにみえる。両者は大国のメリットを最大限活かし、国家予算に裏打ちされた巨大技術を開発し、大味な大衆（人民）文化のプロパガンダで社会統合をはかり、周辺の第三世界を糾合すべく覇を競つたが、西ヨーロッパの帝国主義列強のように直接戦うことはついになかつた。今にして思えば、仲の悪い似たもの夫婦のようなものだった。

純化・不純化論は、一九世紀末から二〇世紀初頭の西ヨーロッパの資本主義の変容をベースに考案されたアイデアであるが、しかし、それはむしろ冷戦期の資本主義にピッタリする面をもつていた。冷戦構造のもとで、合衆国は産軍複合体を形成し予算規模が拡大し、西ヨーロッパも雇用維持や農業保護などを通じて国家の介入規制がますます顕著となつていった。こうした現象をバックに、対外投資をめぐる植民地争奪といった古典的帝国主義をこえて、「国家独占資本主義」「福祉国家体制」といったかたちでバージョンアップされていった。しかし、それらはいずれも、資本主義の不純化の現

れとして概括され、すべて帝国主義段階という大きなプレート上の地殻変動とみなされたのである。

ところが、二十世紀末にはじまつた冷戦体制の崩壊は、プレートそのものの大転換であつた。新たなプレートを突き動かすマグマは、冷戦体制のもとで右からも左からも低開発を強いられてきた地域・国家における資本主義的發展であつた。これをグローバルイズムとよぶとすると、社会主義諸国の崩壊と先進資本主義国を席捲した新自由主義の台頭は、みなこの同じプレート上での地殻変動であつた。昨年から今年にかけてのチェンジも、新自由主義に変容を迫るものではあつても、グローバルイズムというプレートを転換するものではない。

このプレートの大転換は、純化・不純化論に幕を引いた。資本主義は一旦は純粋な資本主義に接近しながら、その後百年余り、いくつのかたちをとりながらも、不純化の道を行くでいるというシナリオは終わった。そして、不純化というかたちで辛うじて段階論のうちに残された、純粋資本主義像を基準に、それに近づき離れるといった変容という問題は消散し、専ら資本主義の多様化だけが強調されるようになる。しかし、現象を比較すれば類型化はできる。純粋資本主義の原理論の出る幕はない。これが第三幕の結末ということになる。

## 6 変容論的アプローチ

私はこの三幕ものの長い芝居を観ているうち、何か厭な予感を肌で感じるようになり、幕切れ近くにとうとうひどい腰痛に見舞われる羽目になった。一九九九年秋のことだった。利いた風なことをぬかしてきた私の腰砕けは友人たちにウケた。「借りものの理論を自分の足で支えるってえのは辛かろうぜ」などとかからかわれ、一人りハビリに励みながら、原理論のあり方について改めて根本から洗いなおすようになった。私だけの第四幕だ。

考えてみれば、純粹資本主義というのが、はじめからどこかシツクリこなかつたのだ。私は原理論の研究者として、厳密な演繹的推論に徹するように育てられてきた。用語を正確に定義し、そうAを規定するならば必ずBということになる、BならばCである、そしてCならば少なくともDということはある、云々、といった論理展開で全体像を理論的に構成する方法をたたくき込まれてきた。こうした思考方法にある程度慣れてくると、たいていは目をつぶっていてもスルスルと進むようになるのだが、時として、どうしてもうまくゆかないところが出てくる。行き詰まったときに「一九世紀イギリスの現実はどうだから」などと誤魔化さず、バカ正直に論理にしがみつくことで原理論の内部から仄見えてくる開口部である。ツルツルに磨かれた「美しい」理論より、昔から、アバタやエクボのほうに気を惹かれる質たちなのだ。

目を凝らすと、どうやら、こうした部分は外部からいくつか、条件をもちこむことで、うまく繕つてあるらしい。さらに踏み込んでみると、純粹資本主義論がこの外的条件に独自のバイスをかけていることが気になってきた。純化・不純化論が課す単一資本主義像に合わせ、演繹的な内部の論理とシームレスにつなぐため、単一の外的条件に無理に絞り込むかたちになっている。資本主義の原理像は、現実の資本主義がどのように変容し多様化しようとも、不動でなければならぬという要請に健気けなげに応えようとしている。美人も辛いものだ。純粹資本主義は「変化」を含んではいても、その内部に「変容」の契機はあつてはならない。変容や多様性は、原理論の外部に付加される非市場的要因のせいだという結論から、すべては逆算されているのだ。

逆に開口部に光を当てて再構成してみると、資本主義がどのような仕掛けで、その姿かたちを変えるのか、変容の問題が理論の内部に半分入ってくる。こういう原理論なら、資本主義は変わった、というときの主語になる資本主義像を構築できるのではないか、そして、「変える力」の加えようも、もう少しわかるかもしれない。開口部をどう埋めるかには、暗黙の合意が社会的に必要となる。資本主義はその意味でイデオロギー的な社会であり、政治的説得が重要な意味をもつのである。現実の資本主義は、不変の純粹資本主義と不純な要因の合成である、現実がどんなに変わっても資本主義は変わ

らないのだ、という硬直的な本質論を乗りこえられるかもしれない。理想の社会主義もあれば、現実にはひどい社会主義もあつたように、悪い資本主義もあれば、よい資本主義もある。そして、これらはある範囲で変えることができるのだ。

このことを明らかにするためには、さらにもう一步開口部に立ち入ってみよう……と思つたが、オバマ大統領の話につられて読みはじめた人は、もう耐え難い睡魔に襲われているころだろう、ここらで切り上げよう。ともかくこうした視点で資本主義の変わり方の構造に焦点を当てる方法を、変容論的アプローチとよび、これで「ちよつと変わった経済原論」のテキストをつくってみようと夢見るようになったとき、なぜか腰痛も癒えていた。本当は書名に付けたかつた「ちよつと変わった」というのは、風変わりなという意味もあるが、これまでとは内容が変わつたという意味でもある。そして、何よりも「資本主義が変わつた」という文が成り立つような、というのが真意だ。

一年ほどかけてなんとかこれを書きあげたころ、たまたま大学院で同じ釜の飯を食つた友人と飲む機会があつた。旧交を温めるべく、やおら鞆のなかから草稿を取りだしてみせると、目次を一瞥して朋友曰く「懐かしいね、昔の原論とちよつとも変わっていないじゃないか。」と。若いころはたしか物象化が十八番おはこだつたが、当時から「化」のつくものには至つて目がなく、今では情報化とか温暖化とか少子化とか、手広く

商つている憎めない男だ。で、我答えて曰く「たしかにお宅はすっかり変わった。でも変わり身の早さは昔とちよつとも変わつてないな。」「おいおいイヤミか。」「ちよつと違う。精確に言えばイヤツカミ……だ。」「ちよつと白けた笑いがいつまでも続いた。

変わるといふのは、ちよつと変わるくらいがちよつどよいのかもしれない。それをこえれば、違うというのだ。私は帰りの地下鉄のなかで取り留めのない回想にふけりながら、テキストに次の一問を追加しようと、いつしか心にきめていた。「変わると違ふはどう違ふのか。」

(おばたみちあき 経済理論)